



無駄の排除のし過ぎは

いかがなもの？



今年は本当に寒い日々が続きました。桜の花が咲かないのではないかと心配しましたが、やっと春が訪れました。私は新宿中央公園、神田川周辺、さらに新宿御苑の桜を満喫しました。やっと開花した桜の色も寒さのせいで例年より淡いような気がします。

さて、この時期の往診（私はいつも自転車での往診です）には、ひとつの楽しみがあります。それはちょっとした街角に、とてもすばらしい木々や花を発見することです。混雑した桜の名所以外にも、春を実感できる場所が近隣にあるのはうれしいことです。

ところで、現代の世の中で、人は無駄を排除し過ぎているために大切なもの（余裕）を失っているような気がします。信じがたいようなトラブルの報道が多くありますが、「余裕」のないことがトラブルの要因のようですね。医療の分野でも、数字だけの効率を求め、無駄を切り捨てると事故が起きやすくなります。診療所では、一年に一度しか使用しない、しかし絶対に必要な医療薬品を安全のために用意する必要があります。このためには、診療所にも余裕が必要です。

今年度の医療費（診療報酬）改訂でも、街の診療所はさらに診察料が下がりました。国はなにを思うやら……。

また話が変わります。

体調を壊し、しかし忙しいので会社が休めず、土曜日まで医者にかかれぬ患者さんが昔よりも多くなった気がします。診療所で可能な治療はもちろん行いますが、重症な患者さんの入院の受け入れ先を探すことが、特に土曜日は困難です。その理由は、大学病院や総合病院の多くは、実は土曜日はお休みのことが多く、救急の受け入れが困難なためです。あまり我慢せず、症状の改善しない患者さんは早めに受診できればと考えています。

最後に医者らしく、病気の話のひとつ。

最近、胸焼けや前胸部の違和感を訴えて来院する患者さんが多くなりました。さまざまな病気が考えられますが、逆流性食道炎という病気によることが多いようです。私が医者になった昭和 50 年代にはあまり多くない病気でしたが、暴飲暴食、特に油物、甘い物を多く摂取するようになった現代人に急激に増えています。有名な心臓の先生が、自分自身のその症状の強さのために逆流性食道炎を狭心症と間違えたという笑い話もあるほど、強い痛みを覚える方もいるようです。ご不安の方は、一度相談にお見えください。



- 今月は「伊藤外科ニュース」の発行が遅くなってしまいました。これからは、毎月 10 日を目標に、発行していきたいと思えます。

三弓先生の本棚



今回の一冊

『天切り松 闇がたり』 浅田次郎

三弓は流行作家や流行り物の小説にはさして興味がなかったし、小説よりはノンフィクションを多く愛読していたように思う。その三弓があるとき、「浅田次郎はいいなあ。おい、「天切り松 闇がたり」を読んだか」と言ったことがある。

浅田次郎といえば、「小説の大衆食堂」を自称するほど、多岐にわたる題材を扱う現代屈指の小説家だ。『鉄道員 (ぽっぽや)』を始めとする『泣かせ』ものあり、幕末の新選組を扱った『壬生義士伝』や中国・清朝を舞台にした『蒼穹の昴』といった時代物あり、初期にはヤクザが経営するホテルを舞台とした『プリズンホテル』も人気を博した。

ご存知でした？ 浅田次郎氏は中野の鍋屋横丁の生まれ。現在の西新宿に属する『淀橋』や『角筈』などもよくご存知のようで、短編集『鉄道員 (ぽっぽや)』には、『角筈にて』という昭和の新宿が舞台になった、それは泣かせる小説が掲載されています。

で、『天切り松 闇がたり』。もちろん、読んでいました、ワタクシも。大正ロマン花咲く頃、江戸と東京が交差する下町を舞台に繰り広げられた義賊「目細の安」一家の義理・人情話。簡単に言うてしまふところなのだが、そこは浅田次郎。まだ年端も行かぬ頃、一家に拾われた「天切り松」こと松蔵が、70年もの年月を経た昭和の終わりの平成初めのバブル時代に、思い出深い留置所に身を寄せて、『義』も『情』もあつた時代の盗っ人たちの話を、ケチな仕事で留置されているハンパ者や警察関係者に、『闇語り』といふ語り口で聞かせるといふ舞台設定になっている。

この小説は、『闇の花道』『残侠』『初湯千両』『昭和俠盗伝』の4巻構成になっているが、2巻に、松蔵が兄貴分の栄治から「天切り」といふ忍びの技を教わるくだりがある。夜の帳が下りた頃、豪華な洋館に屋根から忍び込む（つまり「天切り」）のだが、この中で、寝入っている家人をさらに深い眠りに誘う「息合わせ」といふ術が出てくる。

話が飛んで恐縮だが、言語伝達が不可能になった病の御仁の看病をしているとき、この「息合わせ」を思い出した。どこが辛いのか、痛いのか、言葉で伝えられない相手の側に添っているのもまた、辛いものである。少しでも相手を楽しませてあげられないものか。最初は病の人の息にこちらの息を合わせ、相手の息を誘うように、こちらの呼吸を徐々にゆっくりと深くしていく。そのとき、息に合わせながら、ごくごく軽くやさしく「ソ・ソ」と布団の上から拍子をとって続けてみた。すると、苦しそうだった病の人の息が落ち着いてきて、穏やかな眠りについたのである。これ、まさに「息合わせ」の術。さすが、天切り松の師匠！

うっか話がそれてしまったが、それも三弓ゆずり、いずれにせよ、『義理』も『人情』も『江戸弁』もすっかりなくなったこの時代に、前時代的な感性の持ち主だった三弓がハマったのがよくわかる一冊であります。（一弓）